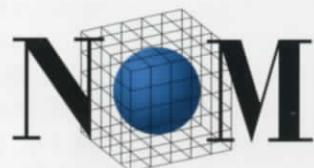


雪椿通信信



岡本太郎《顔》
1965年

前衛作家として知られる岡本太郎が、昭和36年8月15日、純粋な芸術活動を求め、それまで所属していた二科会を脱退した後の作品。岡本独特の画風は、ややもすれば漫画的で、やすっぽさも感じさせるが、一方で時代を突き抜けた尖端的で特異な表現でもある。それは岡本の言葉を借りれば「対極主義」の姿と言えよう。本作のような漢字、記号的形象は、'60年代の作品に見られるが、波状の線描はその後の岡本作品に通じて見られる形態である。赤い地に黒く揺れる痕跡は、靈気を発して舞踏している人型のようでもあり、また下の〇二つが目とすれば、題名のように「顔」にも見える。

東京藝術大学創立 120周年記念 パリへー洋画家たち百年の夢 黒田清輝、藤島武二、藤田嗣治から現代まで

2007年6月23日(土)~8月5日(日)

歴史をひもとくと、不思議なことがいろいろとあるものです。明治20年(1887)に東京美術学校設置の勅令が公布されてから今年で丁度120年となります。(実際に開校したのは2年後の明治22年です。)これを記念して企画されたのが、今夏当館開催の「パリへー洋画家たち百年の夢」展です。明治以降の日本洋画の歴史は、東京美術学校及びその後身である東京藝術大学の役割を抜きに語ることはできません。また、黒田清輝以降、新しい表現と思想を求めてパリを目指した洋画家たちが、その歴史を築き上げてきたといつても過言ではないでしょう。今回の展覧会は、「芸大」と「パリ」をキーワードに、日本近代洋画史に残る名品約100点で日本洋画の歩みを振り返るとともに、その将来への展望をも明らかにしようとする試みです。

さて、不思議なことというのは、洋画がこれほど重要なジャンルであるにも拘わらず、創立当初の東京美術学校には洋画科が存在しなかったという事実です。忘れられていたのでしょうか?いえ、とんでもない。明治開国に伴う急激な欧化政策に対する反動から、明治10年代に国粹主義が起った結果、開校時には洋画が完全に排斥されてしまったのです。フェノロサ、岡倉天心といった日本美術を擁護する指導者によって日本画を教える絵画科、彫刻科、図案科のみが置かれ、純然たる日本の伝統美術を学ぶことが奨励されました。しかも教室は疊敷き、学生の制服は平安時代の服装という凝り様でした。

この徹底した西欧否定主義も近代化の時流には逆らえず、

開校から7年を経た明治29年(1896)には西洋画科が新設されます。そこにフランス帰りの洋画家黒田清輝が迎え入れられました。黒田は前年、内国勧業博覧会に『朝妝』という裸体画を出品して世間の批判を浴びたばかりです。本展にはこの焼失してしまった『朝妝』の復元パネルも展示される予定です。

一方、洋画家同士にも、闘争がありました。先に述べた国粹主義から排斥されていた浅井忠の率いる画家たちは「旧派」と呼ばれ、黒田の「新派」と激しく対立していました。浅井忠は明治31年に東京美術学校教授となります。黒田との対立を避けて明治33年にはパリ留学に旅立っています。帰国後の浅井は関西へ拠点を移し、その門下から梅原龍三郎、安井曾太郎といった逸材を輩出しています。安井、梅原もパリ留学をし、後に東京美術学校の教授となり……という具合に、日本洋画の歴史というものが、複雑な様相を呈しながらも、東京美術学校とパリを2つの焦点として横円を描きながら発展していくように見えるのではないでしょうか。時代とともに、パリ留学の目的も内容も、国家的任務から個人の憧憬の実現へと、大きく変化する訳ではあります。

展覧会では、明治・大正・昭和から今日に至るまで、パリを目指した洋画家たちの夢の軌跡をたどりつつ、西洋と出会ってから日本が経てた百年余りの歴史にも思いを馳せて頂ければ幸いです。

(主任学芸員 平石昌子)

藤城清治 光と影のファンタジー

2007年8月11日(土)~9月30日(日)

藤城清治、といえば、誰もが知っている影絵作家です。あの愛らしい三角帽子を被ったこびとをはじめ、大きな目が印象的な少女や猫たちが繰り広げるメルヘンの世界は、テレビや印刷物などで、目にしたことのない人はいないくらいではないでしょうか。それでも、テレビでも印刷でもない、光と影による本物の「影絵」を見たことのある人は、案外と少ないかもしれませんね。新潟県立近代美術館では、この夏、藤城清治の影絵作品を一堂に展示、紹介します。

藤城清治は、少年のころから油絵や水彩画に親しみ、猪熊弦一郎や脇田和に師事して新制作派展などに出品、18歳の時すでに銀座のギャラリーで個展も開くほどでした。また、高校(慶應義塾大学予科)では児童文化研究会とパレットクラブに所属し、戦時中であったにもかかわらず人形劇と油絵に夢中になっていたといいます。カトリック教会の日曜学校で人形劇を披露することも多く、大戦中の学徒出陣で配置された九十九里浜でも、暇を見つけては慰安演芸会で少年兵たちと人形劇をしたといい、画才の面だけでなく、子供たちをはじめとした多くの人々を楽しませ慰めるという意味でも、すでに、ここに現在へと続く仕事の片鱗を見ることがあります。やがて終戦後復学し、慶應義塾大学在学中、講師で人形劇研究家の小沢秀匂を通して知ったアジアの影絵芝居に、魂をゆすられるような感銘を受け、影絵の制作にのめり込んでいくことになるのです。

はじめは、空き缶や包み紙、ダンボール紙と電球を使って作ったシンプルなモノクロームの世界から始まった藤城の影絵は、やがて色彩を加え、華麗に、そして幻想的に、深みを増していきます。「最近の作品は影絵というよりも光と影の絵、あるいは光の絵、または藤城ワールドと呼んだほうがいいかも知れない。」と自身で述べているように、影絵を芸術の域まで高めていったのです。海外では、藤城のような影絵作家が他にいないことから、彼の作品は「藤城画」と呼ばれ、評価されているといいます。それぞれの作品の底には、人々に「生きるよろこびと愛と平和と夢と感動を」という藤城の願いが込められているようです。

この展覧会では、作家本人が所蔵する作品を中心に、戦後間もない頃のモノクロームの作品から、80才を越えた今もなお、創作意欲旺盛な作家の最新作に至るおよそ150点で、藤城清治の半世紀以上にも及ぶ創作活動をご紹介します。作品に光を透過させることで、映像や印刷ではけっして見ることのできない本物の「影絵」をご堪能ください。会場では、鏡や水面を配して、さらに美しい幻想的な世界を演出します。

(主任学芸員 宮下東子)



黒田清輝 《婦人像（厨房）》 1892年 東京藝術大学



佐伯祐三 《オーヴェールの教会》 1924年
鳥取県立博物館



ラファエル・コラン 《田園恋愛詩》 1882年
東京藝術大学



藤島武二 《女の横顔》 1926—27年
ボーラ美術館（ボーラ・コレクション）

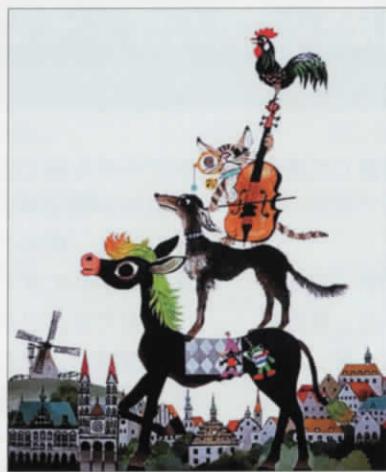
■観覧料

	一般	大学・高校生	中・小学生
当 日 券	1,000円	700円	500円
団 体 券	900円	600円	400円
前 売 券	800円	—	—

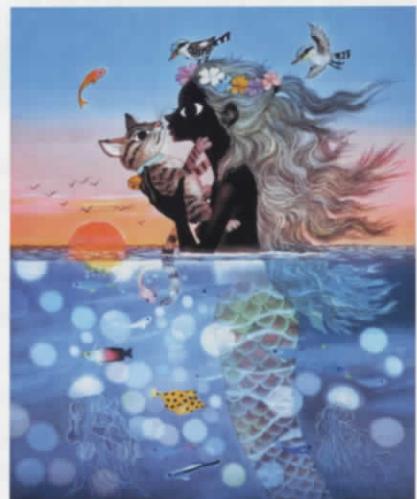
*団体券は20名様以上 *中・小学生は、土・日・祝日は無料



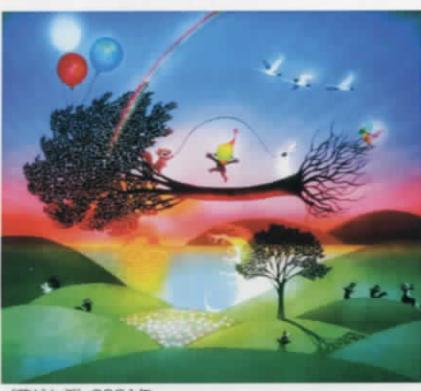
《アリスのハート》 2005年



《フレーメンの音楽隊》 2003年



《夕陽の中の愛の奇跡》 2004年 ©Seiji Fujishiro/HoriPro



《夢がとぶ》 2001年

■観覧料

	一般	大学・高校生	中・小学生
当 日 券	1,000円	700円	500円
団 体 券	900円	600円	400円
前 売 券	800円	—	—

*団体券は20名様以上 *中・小学生は、土・日・祝日は無料

研究室より ——三芳悌吉の絵本『ある池のものがたり』—構想から完成まで

1986年、三芳悌吉は、新潟市西大畠に昔あった「異人池」の移り変わりを描いた絵本『ある池のものがたり』を刊行します。事前の調査にあたり、三芳は新潟に足繁く通い、数百枚の古い写真や資料を集め、ノートを作りました。100年以上前からの池と地域の歴史を、調査によって自身で研究確認した上で制作に入ったわけです。

当館には、絵本の原画だけではなく、初期段階の構想メモ帳やラフスケッチを収蔵しています。これを見ると、できあがった絵本が「引き算」の産物であることが見えてきます。

たとえば、第一場面。絵本の文章では、「いまから100年いじょうもまえのことです。日本海にそぐ大川のほとりに、大きな町がありました。町と海のあいだには、砂丘がひろがり、町のはずれには、北からふく冬のはげしい砂あらしのために、荒地になっていました。」ただけあります。しかし、構想メモでは、その荒地が湿地であったこと、砂丘の性質やそこに生息する動物や植物の名についても言及しているばかりでなく、政治的背景、そして池の歴史に関わる自身の推理まで書き込まれています。完成作になるまで、編集者との検討も含め、多くの推敲を重ね、趣旨に適う本当に必要なことだけを残し整

理していったのでしょうか。絵も、ラフスケッチの段階では40場面もあったものが、完成した絵本では24場面まで減っています。

「三芳悌吉の世界」展では、この『ある池のものがたり』の原画とラフスケッチを、会期後半に展示します。これを見比べることによって、三芳の情熱と自然科学の絵本作家としての眼差しを感じ取ることができるでしょう。

(主任学芸員 宮下東子)



三芳悌吉『ある池のものがたり』原画 1986年

変わりゆく日本画展 —横山操、そして現在—

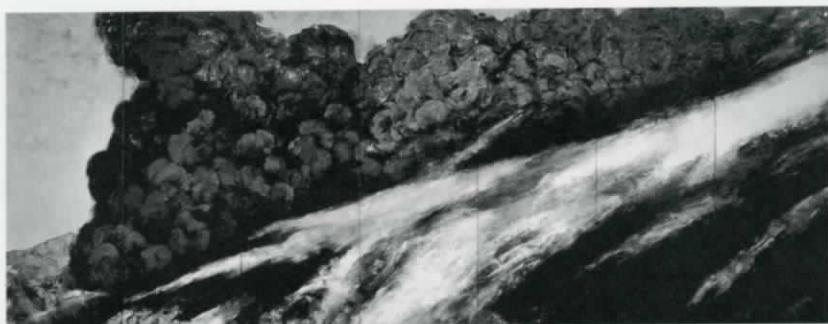
2007年4月10日(火)～6月3日(日)

1月から3月にかけて 万代島美術館で開催した変わりゆく日本画展を、一部変更して近代美術館で開催いたします。

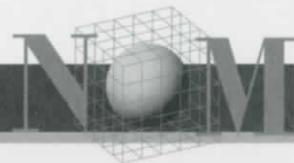
「日本画」と言えば「花鳥風月」という言葉が思い浮かびます。しかし、線描を中心に繊細な着色、また、装飾性や、余白などに情感を求める従来の日本画は、第二次世界大戦敗戦による伝統文化への意識低下とともに、低く見られるようになり、「日本画滅亡論」まで起こるに至ります。以降、日本画家たちは、日本画の生き残りをかけ、新しい表現の追求へと向かいました。そしてその代表に

挙げられる郷土出身の横山操以降、画壇には様々な新しい息吹が生まれ、多様な日本画が展開されてきました。今日では、従来の日本画の範疇では収まりきれない作品まで描かれてきています。

本展では、日本画変革の先駆の一人である横山操の作品を倍増し、また、同時期、京都を中心に日本画革新を進めたパンリアル美術協会設立会員の三上誠、星野眞吾らの作品を加え、現在活躍の中島千波、千住博らまで、敗戦から今日までの日本画の動向を所蔵品からご覧いただきます。



横山操『十勝岳』1962年



分野	分野別点数	合計点数
世界の美術		0
日本の美術	日本画2 油彩画等1 工芸7	10
新潟の美術	日本画4 油彩画等1 工芸3 素描111 資料23	142
総合計		152

日本の美術

分野	作家名(生歿年)	作品名	制作年	寸法(cm)	素材・技法・形状	備考
日本画	上野泰郎 うえの・やすお (1926-2005)	もろびと	1975年	左右105.0×25.0 中 108.5×56.4	麻紙彩色	寄贈
		佳きおとづれ	1992年	180×180	絹本彩色	
彫彫	岡本太郎 おかもと・たろう (1911-1996)	顔	1965年	180×226	油彩・キャンバス	寄贈
工芸	佐々木象堂 ささき・しょうどう (1892-1961)	鋳銀鼎式香炉	1950年	高さ17.8、幅10.8	鋳銀	管理替
工芸	宮田脩平 みやた・しゅうへい (1933-)	ブローチ 机、椅子(5点)	1975年	(机) 7×5 (椅子)各7.4×4.3	銀、ロジュームメッキ	寄贈
		トルソ(一対)	1975年	各30×18×9	ステンレス	

新潟の美術

分野	作家名(生歿年)	作品名	制作年	寸法(cm)	素材・技法・形状	備考
日本画	尾竹国觀 おたけ・こっかん (1880-1945)	騎兵団	明治後期	73.1×334.8	紙本墨画・六曲一隻屏風	寄贈
日本画	長谷部権次呂 はせべ・ごんじろ (1921-)	女子警防団	1943年	190×85	紙本彩色	寄贈
日本画	藤田熊雄 ふじた・くまお (1918-1997)	とむらい	1959年	141×170	紙本彩色	寄贈
		狩人(またぎ)	1960年頃	141×170	紙本彩色	
彫彫	田代修一 たしろ・しゅういち (1908-1993)	雪の妙高山	1979年	60.8×73	油彩・キャンバス	寄贈
工芸	柴田武次 しばた・たけじ (1907-1944)	錫打込魚文花瓶	1941年	高さ32、径13	鍛金・錫	寄贈
		鍛銀花瓶	1937年	高さ28、径20	鍛金・銀	
		香炉	不詳	高さ12、径6×12	鍛金・鉄	
資料	柴田武次 しばた・たけじ (1907-1944)	彫金懸棚含む23点				
素描	小島丹漾 こじま・たんよう (1902-1975)	雪の駅路・小下絵	1954年頃	19.5×27	紙・墨・木炭・パステル	寄贈
		その他 小下絵58点				
素描	長井亮之 ながい・りょうし (1903-2004)	見学・スケッチ	1969年	31.9×37.8	紙・鉛筆	寄贈
		その他 小下絵51点				

○平成17年度、相澤コレクション1,088点の作品を寄贈いただきました相沢直人さんに、文化振興に寄与した功績により去る2月27日、国から紺綬褒章、新潟県知事の感謝状が手渡されました。あらためて感謝申し上げます。

○当館周辺の再開発により、美術館の住居表示が変更になりました。ご訂正等よろしくお願ひいたします。

旧 〒940-2083 長岡市宮関町字居掛278-14 → 新 〒940-2083 長岡市千秋3丁目278-14

お知らせ

新潟県立近代美術館長 水野 敬三郎

昨年の秋は当館だけでなく、各地の美術館・博物館で仏像展や仏像を含む仏教美術展が開かれました。別にしめしあわせたわけではなく、偶然のめぐりあわせですが、近ごろの荒涼とした世相の中で、魂のふるさとを求める人々の願いに応えたものといえるでしょう。

上野の東京国立博物館では特別展「仏像—一木にこめられた祈りー」、奈良・京都その他各地に所在する一木彫像を取り上げて、木の靈性と仏像の結びつきに日本文化と自然とのかかわりを浮かび上がらせました。新潟県からも小栗山観音堂の木喰作三十三觀音像が参加しています。九州では福岡市博物館で弘法大師帰朝1200年記念の「空海と九州のみほとけ」展、和歌山県立博物館で世界遺産登録記念の「熊野・那智山の歴史と文化—那智大滝と信仰のかたち」、名古屋市博物館で天台宗改宗1200年記念の「比叡山と東海の至宝—天台美術の精華ー」、笛吹市に一昨年開館した山梨県立博物館では「祈りのかたち—甲斐の信仰ー」。

仏像は信仰の対象であり、複雑な形をした像もあって移動や陳列に大変気をつかうのですが、それぞれの館の学芸員は大いに頑張って、どれも見ごたえのある展覧会でした(私自身は九州・和歌山まで足を運べずカタログだけの見学でした)。世の仏像ファンや研究者も東奔西走で大変でしたが、こたえられない秋でした。これらの展観は、それぞれ設定されたテーマについて考えさせてくれ、ことに各地域の歴史や風土が仏像のあり方に反映していることが興味深く眺められました。

ここでは山梨県と新潟県の鎌倉彫刻に例をとってみましょう。この地に定着していた甲斐源氏の武田信義と安田義定が、早くから源頼朝に協力して、鎌倉の有力な御家人となりました。頼朝発願の鎌倉勝長寿院の本尊を造立した奈良仏師成朝の作と伝える仁王像や、早い時期の運慶派やその流れを汲む作品が多く遺存するのはそのためで、それがこの地域の大きな特色となっています。

新潟県は鎌倉とは大分離れたその土地柄から、鎌倉の御家人は地頭として入ってきたものの、初期の慶派の仏像は見出せません。鎌倉時代初めの越後で目立つのはむしろ土着の仏師の作品です。幸いに銘記によって製作年代がわかる仏像が二体あります。一つは魚沼市円福寺の阿弥陀如来像で、

建保2年(1214)に藤原某が父母等の菩提を祈って造らせたものです。この地の豪族でしょう。まだ鎌倉新様式の氣配はなく、前代から続くこの地の仏師の作といえます。いま一つは南魚沼市觀音寺の君帰觀音として知られる像で、承久2年(1220)にやはり土地の豪族出雲真恒夫妻が造らせました。面長で瘦身、やや素朴ながら同時期に見られない独特の造型です。同じ南魚沼市の天昌寺觀音菩薩像は、全体の造型感覺や耳の特殊な彫り癖の一致から、君帰觀音と同じ仏師の手になると思われます。天昌寺の持国天・多聞天像も同じ作者のものです。円福寺像とは別の仏師ですが、この地域で活動していたことが確かです。面長の顔つきには平安時代後期の長岡市中湯町塚越家の觀音菩薩像に通ずる趣きがあります。新しい流行に染まらず、地域の感性と昔ながらの技法(一本造り)を守りながら、独特の魅力ある形を造っています。この仏師ともう一人、平安時代後期に溯りますが他に例のないユニークな表情と姿態の寛益寺十二神将像を造った仏師とに、一番の声援をおくりたいと思いました。



聖觀音菩薩坐像 南魚沼市 天昌寺



十二神將立像(辰神) 長岡市 寛益寺

あしあと

2006年9月～2007年3月

新潟の仏像展

2006.9/30(土)～11/12(日)



県内各地で守られてきた国指定重要文化財・県指定文化財を中心とする54件・82点の仏像等を一堂に紹介。平日にも多くのお客様が訪れ、会期39日間の入場者数は28,000人を超えるました。



展覧会の監修をかけた水野館長による解説会(10/22)。仏像の数を超える(?)参加者の皆さんが熱心に聞き入っていました。要日の中越大震災2周年は特別無料開館としました。

巡回ミュージアム



川口中学校(写真)、糸魚川中学校、佐渡市新穂体育馆の3カ所で開催。「本物の作品が自分の学校に、街にやって来た」と言うことで、皆さん目を輝かせていました。

ディズニー・アート展

2006.11/23(土)～2007.1/14(日)



500点を超える作品に食い入るように見入る観覧者のみなさん。ディズニーのアニメーションがつくられる過程の膨大な量のスケッチやアニメーターの手仕事に感嘆の声が上がりました。



今までに無い大がかりな造作の展示室、体験コーナー、映像ブース、ショップと館内全てディズニー・アートの世界で染め上げた展覧会。お子さん連れのファミリーを中心に5万人を越すお客様がみえられました。

長野県信濃美術館所蔵

東山魁夷と信州の美術展

2007.2/3(土)～3/21(日)



東山魁夷の作品40点を一堂に展示。



長野県信濃美術館の木内学芸員によるギャラリーツアー。約70名の来館者が熱心にお話に耳を傾けました。

イベント情報

4月～9月

●企画展

- 4/10(火)～6/3(日) 「変わりゆく日本画展—横山操、そして現在—」
6/23(土)～8/5(日) 「パリへ—洋画家たち百年の夢」
8/11(土)～9/30(日) 「藤城清治 光と影のファンタジー」

●所蔵品展示

- 3/27(火)～6/17(日) 「三芳悌吉の世界展」①
6/21(木)～9/2(日) 「安井賞候補の作家たち展」②
9/5(水)～11/11(日) 「楽しいアート、アートを楽しむ」③



①三芳悌吉《窓辺》1986年



②猪爪彦一《風景》1990年



③山口勝弘《作品》1967年 当館寄託

●映画鑑賞会（無料／講堂にて）

- 5/12(土) アート・ドキュメンタリー *ビデオ上映
「マーサ・グラハムの生涯」(1994年、アメリカ)
6/16(土) アート・ドキュメンタリー *ビデオ上映
「ピエール・クロソウスキ—イマージュの作家」
(1996年、フランス)
7/28(土) 「舞踏会の手帖」(1937年、フランス)

○万代島美術館情報

- 「ティアラ展」(4月1日～5月9日)
- 「始皇帝と彩色兵馬俑展」(5月26日～7月16日)
- 「蕗谷虹児展」(7月28日～9月24日)

The Niigata Bandaijima Art Museum
新潟県立万代島美術館

〒950-0078 新潟市万代島5-1 (朱鷺メッセ内 万代島ビル5F)
TEL 025-290-6655 FAX 025-249-7577 ホームページ www.lalanan.gr.jp/banbi/

新潟県立近代美術館だより 雪椿通信 第28号

THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART

編集・発行 **新潟県立近代美術館**

〒940-2083 新潟県長岡市千秋3丁目278-14
TEL 0258-28-4111㈹ FAX 0258-28-4115

<http://www.lalanan.gr.jp/kinbi/> e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp

制作・印刷 株式会社 中央印刷
(〒940-0041 長岡市学校町1-9-21 TEL 0258-35-3500)

発行日 2007年4月1日

●共催展

- 6/8(金)～6/17(日) 県展長岡展

●講座（聴講無料／講堂にて／午後2時～）

- ◆館長による美術史連続講座
第1回 10/13(土) 快慶の彫刻
第2回 10/27(土) 宋代美術と鎌倉彫刻
- ◆美術鑑賞講座
5/19(土) 「三芳悌吉の絵本」
宮下主任学芸員
6/2(土) 「西洋の版画 デューラーとレンブラント」
今井主任学芸員
7/7(土) 「フランス近代音楽を聴く—美術とのかかわりから」
長嶋美術学芸員
7/21(土) 「作家はパリで何を学んだか」
平石主任学芸員

●ワークショップ

- ◆「びじゅつ☆体験隊」
7/1(日) 野外彫刻であそぼう
8/19(日) アートなタマゴ！石こうで遊ぼう
- ◆「発見！びじゅつかん」
5/27(日) め・い・ろ・な美術館
9/16(日) クロスワードで美術館名所めぐり

利用案内（4月～9月）

■開館時間／午前9:00～午後5:00（金曜日は6:30）

※観覧券の販売は閉館30分前まで
レストラン／午前10:00～午後5:00（金曜日は6:30）
※ラストオーダー〔食事〕 午後4:00（金曜日は5:50）
〔飲物〕 午後4:30（金曜日は6:10）
ミュージアムショップ／
午前9:00～午後5:00（金曜日は6:30）

■休館日／月曜日（月曜特別開館日あり）

※ただし月曜が祝日の場合は開館し、翌日休館します。（5/1、7/17、9/18、9/25は休館）
4/16、4/30、5/21、6/11、7/16、7/23、8/13、9/10、9/17、9/24の月曜は開館します。
※6/18(月)～6/20(水)は展示替えのため休館します。

■観覧料金

- 企画展
企画展によって観覧料が異なります。
なお、企画展の観覧券で、展示室1・2・3もご覧になれます。
- 展示室1・2・3
●一般／410円(330円)
●中等教育（後期）・高校・高等専門・大学／200円(160円)
※学生証を提示してください。
- 小学・中学・中等教育（前期）／100円(80円)
※（ ）内は20名以上の団体料金です。
※小・中学生は土・日・祝日の観覧料が無料になります。
※障害者手帳をお持ちの方は無料になります（受付にて手帳をご提示下さい）。